

山びこ通信

2月号
2005.2.17

最終回 ミニミニようちえん



先月きてくれたおともだち。またきてね！

「ようちえんまであるこう！」(無料)

3月5日(土) 午前10時～11時

上終公園に9時50分集合！

- *上終公園からお母さんと手をつないで、幼稚園まで、みんなと一緒に歩きましょう！
- *雨天時は、幼稚園にそのまま10時にお越しください。

最終回 山びこクラブ



秋のカブラであそぼう！でつくった「かまくら」

「カブラでかまくら作りに挑戦しよう！」(無料)

2月25日(金) 午後4時～5時30分

- 小学生たちで、「かまくら」をマスターしよう！
10人で力を合わせれば、30分ぐらいでできるよ！
- 暗くなりますので、遠方の方はお迎えをお願いします。

—お電話またはFAX(別紙をお使い下さい)にて、お申し込みください—

青春ライブ授業！ 入場無料



『「考える」ことについて』
(青春ライブ授業！第5回目)
の授業風景

第12回 3月11日(金) 午後7時～8時30分

「考えるってどんなこと？」
廣瀬一隆(滋賀医科大学2回生)

第13回 3月25日(金) 午後7時～8時30分

「Like likes like」
細水康平(京都大学大学院修士2回生)

場所 第3園舎(つき組の部屋)
対象 中学・高校生・保護者一般

—お電話またはFAX(別紙をお使い下さい)にて、お申し込みください—

「山の学校」 クラス紹介

早いもので、「山の学校」も4月から3年目を迎えます。日頃ご支援下さっている多くの皆様のおかげと感謝申し上げます。さて、今月号の「山びこ通信」では、平成16年度の授業をふりかえり、それぞれのクラスの先生が日頃何を大切に考え、どのような授業を展開しているのか、クラス便りを寄稿していただきました。

まるで幼稚園の子どもたちが夢中になって砂場にもぐって穴を掘るように、「山の学校」では、大人も子どもも時間を忘れ、真剣に勉強に向き合う時間が流れています。和気藹々^{おきあいあい}と「学びの山登り」を楽しむクラスの様子を感じ取って頂けたら幸いです。(山下太郎)

—小学生の部—

『ことば』 低学年クラス

(水曜日 4:10~5:10)

担当 山下一郎

『人生をイメージする子ども』

テレビ等による映像文化の影響のせいでしょうか、現代の子どもたちは、一方的に、与えられたイメージに支配される傾向が強いようです。労せずして、すべての事象を映像で捉えることが出来ます。しかも場面は止まることなく、瞬間的につぎつぎと目の前を通過していきます。

昔ながらの“聞くラジオ、聞くお話、読む絵本”等によって得られる想像力や思考力、感性や情操等の不足は如何ともしがたく、それが言語能力の発達の遅れ、ひいては将来につながる人格形成の欠如にも関わってくるように思われます。

ことばの教室の低学年では、“俳句の暗唱”と“話の読み聞かせ”等を通して、“与えられたイメージ”よりも、“想像し、創造するイメージ”の育成を心がけております。

遠山に 日のあたりたる 枯野かな 虚子

この句を初めて暗唱するとき、子どもたちは、句の情景を思い思いにイメージします。「遠山」を、柔らかい丘の連なりと想像する子どももいれば、かつて絵本で見た、峨々たる山々に思いを馳せる子どももいます。ひとりひとりのイメージにより、個々のオリジナルな風景画が描かれます。“話を聞く”場合も、その中身を映像化しなければなりません。耳から得たことばの情報だけで、話のイメージを創り出します。話の流れの起承転結に沿って、さいごには、話の全体把握を必要とします。このことが、「おしべが何本で、めしべが何本」といった知識の詰め込みでは得られない、「智慧」の習得につながるのです。

子どもは話を通して、だれかと出会います。そのだれかを通して自分の人生をイメージし、目標とするイメージの達成に向かって自ら求めて勉強に励みます。これが、本当の勉強の姿だと思います。

少年期に愛読したホメロスの叙事詩から未来をイメージし、トロイアの遺跡を発掘した考古学者シュリーマンのことは、よく知られています。

最近では、大学は出たけれど職につこうとしない、“夢を持たない若者”が増えていると聞きます。

ことばの教室では、“俳句の暗唱”で感性や情操を育み、“話の読み聞かせ”を通して、自らの人生をイメージし、未来を創造する、智慧と夢いっぱいの子どもの育成を願っております。

(文責 山下一郎)

『ことば』 中学年クラス

(水曜日 4:10~5:10)

担当 宇梶^{まさる}卓

「ことば」の時間では、読み書きの基礎について学んでいます。

「読み書き」というと、とにかく手を動かして文章を書き、目を動かして読むという印象が強いのですが、やはり基本としてはしっかり声を出して音読することが重要だと思います。ことばというものは身体が文字通り体得している「リズム」を基点として発せられるものだからです。このことは、ほとんどの子どもが替え歌を好むことから明らかであるように思われます。

これまでの授業では、おもに俳句を作って詠んだり、宮沢賢治や新美南吉などの童話作家の作品を読み合せたりしてきました。文章を書くのが苦手な生徒でも、俳句となるとスラスラと詠んでしまえることができますし、また多くの童話を丁寧に音読することで、句読点での息継ぎ、文章を読む際の声の抑揚など、文章を読むときのリズムを把握できるようになりました。

最近は作文に取り組んでいますが、俳句などの韻文から散文に移行するのはなかなかの難問で、当初はなかなか生徒の手が動かなかったというのが正直な話です。今は日記という形で文章を書き、お互いに発表することで少しずつ文章に慣れていっているというところですね。決して無理強いせず、生徒が自分自身で文章のリズムを体得できるよう、楽しくやっています。

この授業の目指すところは、「自分探し」ならぬ「ことば探し」です。これからも生徒たちと「ことば探し」を続けていきたいです。

(文責 宇梶卓)

『ことば』 高学年クラス

(火曜日 A4:10~5:10・B5:20~6:20)

担当 某

火曜日ことば担当のNです。ちょっと早いですが、来春の「学び」に向けて、今やっていることと、この一年でやってきたことの跡付けをしてみます。

小学生クラスの冬学期では作文を中心にした授業を行っています。春学期に基本的な文章の読み方、辞書の引き方を覚え、夏学期に音読を通じた実践的文章読解力を鍛え、そしてこれらの授業で学んだことを新しいかたちで生み出すのが冬学期の作文力ということになります。要するに、これまでの授業はさまざまな知識、考え方の形式、学習の方法といった専ら基本的な諸事をインプットするためのものでした。これからはその学んだことを自分独自の方法で再構築したものをアウトプットする授業になります。インプット過程が不十分なままですと、当然アウトプットされる成果は不十分なものになってしまいます。その意味で、これまでの学習に対する取り組みの真摯さが直接に反映されるという、ちょっとコワイ時間であるのがこの冬学期なのです。

逆に言えば、これまで着実な学びを続けてきたのであれば、この冬学期に自分の学習の到達した成果をしっかりとつかむことが出来るということです。一方、思うような成果が出なかったといって諦めてしまうようでは、この一年間を諦めるために費やしてしまったようなもので、これはいけません。出たところまでの成果を糧に、不足分を改めて認識する、そしてどのように埋め合わせをしたら良いのか、今後の学習の課題は何であるか、考えてみる良い機会と思うことが肝要です。

往々にして、誰でも出来る努力というのは誰もしないことが多いのです。辞書をこまごま引いたりするのは面倒だからです。英単語だって、つづりの練習をするのは面倒です。誰でも出来るのに誰もやらない。ならば、それをすれば他の人と点差をつけることが可能になるのです。ちょっとの手間で成果は大きく違ってきます。来年度は「もうひと手間」頑張ってみましょう。

(某)

『しぜん』（低学年／高学年）

（火曜日 4：10～5：10）

担当 山下育子／山下太郎

レイチェル・カーソン（米国の海洋生物学者でありベストセラー作家）は、『センス・オブ・ワンダー』という本の中で次のように書き記しています。

『わたしは、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒や豊かな感受性はこの種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代はこの土壌を耕すときです。』

子どもの頃にこの自然を感じ取る心を養い、またそれを仲間と共有する経験を重ねれば、将来、仮に心のバランスを崩しそうになったときにも、再び元気に一步を踏み出していくことができるのではないかと思います。

昔、「たまごっち」というおもちゃが流行りました。このおもちゃを与えてもらった子どもは、一生懸命人工の“子ども”の世話をし大切に育てます。ところが、そのうちどうしても世話ができなくなる時がやって来て、残念ながらたまごちは死んでしまいます。とても悲しく初めは涙が出てくるほどですが、子どもはやがて電源をリセットするともう一度「命のやり直し」ができることに気づきます。「リセットできる命」。ここが、私としては何とも受け入れられないところでした。身近な昆虫であるアリやトンボを、手のひらに包み、大切に思うばかりに羽が取れたり動かなくなってしまったような経験、また買っている犬や猫の死からたった一つしかない命の尊さを身をもって経験することの方が、自然に生かされている私たちにとっては遙かに大切なことだと思います。

「しぜん」のクラスでは、上に引用しましたレイチェル・カーソンの言っている、情緒や感性である土壌を耕すべく、五感や感性を育むことを大切にしたいと、ひとときを過ごすようにしてきました。この1年のクラスを振り返るとき、四季が刻々と変化するお山の自然の中で、目で見て、手で触れて、空気のおいや水の流れ、土の感触を感じながら、自然の中の美しいもの、不思議なものの存在に気づき、仲間とその喜びを分かち合うことができたように思います。

「しぜん」のクラスを通し、私がいつも嬉しく感じたことは、どの子どもも“しぜんのめがね”を持っていること、すなわち、自然の中に何かを見つけ楽しむ心のゆとりを持ち、それを子どもたち同士が一緒になって楽しむ心をもっていることでした。

山を登ってクラスにやってくる途中、子どもたちは木の実や土つきのコケ、草や葉っぱなどを見つけると、毎回お土産のように持ってきてくれました。そうした子どもたちの感動のプレゼントを前にし、みんなでその子のお話を聞くことからクラスの時間が始まっていきました。

来年度春学期からも、自然の中に身を置くことの大切さを意識し、子どもたちとセンス・オブ・ワンダーを共有する時間を大切にしたいと考えています。

（文責 山下育子）

【この1年のしぜんクラスの内容概要】

『春』 自己紹介
お山の春めぐり
タケノコを掘ろう
竹製インテリア飾りをつくる

『夏』 アメンボ“水の上のスケーター”
水生昆虫を探しに
クロアゲハとのお別れ
道ばたのさんぽ／路地、公園へ



於：ワクワクしぜん教室

～夏休みイベント「ワクワクしぜん教室」～

（比叡平～池の谷薬草園訪問見学～大文字山三角点～銀閣寺前）

『秋』 しぜんトーキング
御所の大きな木の下で寝ころんでみたら
球根の観察（チューリップ・タマネギ）
土を耕し球根を植えよう
石焼きいも
落ち葉カルタであそぼう

『かず』（初級／上級）

（木曜日 4：10～5：10／4：10～5：10）

担当 初級：宇梶卓／福西亮馬（隔週）

上級：宇梶卓／福西亮馬（隔週）

初級クラスは1・2年生の、上級クラスは5・6年生の内容を扱っています。

おもにドリルなどの問題を解いているのですが、生徒は単元を終えるごとに教室に貼ってある大きな模造紙に棒グラフを書き込み、達成感を感じさせるようにしています。また、テキストを一冊やり終えたときの充実度は、成功体験としてその子の記憶に刻み込まれ、その後何をするにしても自信をもって取り組むことになるでしょう。とりわけ算数（数学）は集中力が物を言う教科なので、「努力をすればできるんだ」という経験はその子の気力をいっそう高めることになるでしょう。そのためにも、努力の成果を目に残る形にするということは、きわめて重要なことであると思われる。

最近、高学年の生徒たちがこれまで自分で解いてきた中で難問だった問題を編集し、互いに出題し合っています。お互いに問題を出題し合うことは、普段問題を解く際に「出題する側の意図」を理解する助けにもなりますし、何よりも「遊び心」に満ちた感覚が算数に対する意欲を向上させると思うのです。問題を解くときは真剣そのものですが、その真剣さは決して遊ぶときのあの楽しさとは対立しません。子どもは遊ぶときは、きわめて真剣ですから。

これからも問題を解く楽しみを共に経験していきたいと思います。

（文責 宇梶卓）

『かず』（中級）

（火曜日 4：10～5：10）

担当 福西亮馬

このクラスでは、小学校中程度（3・4年）の算数、すなわち、かけ算を基礎として、割り算、小数、分数の入口まで、数の世界を案内することを目的としています。

また初級・上級と同様、ドリルによって自信を培うことも大事にしています。特に小学生の時期に、大人にそばに付いて見てもらった思い出は、将来、数学の力を引き出す源になります。（この思い出はお家でも作れますし、お家と先生（複数の大人）で見るのであれば最高です）

今年度は、非常に好奇心の旺盛な生徒に恵まれました。そして自然と、発展的なことにまで触れました。たとえば、 $2 \times 2 \times 2 \dots$ を電卓で叩き続けると、

$(1=2^0)$, 2, 4, 8, 16……1048576, 2097152, 4194304, 8388608, 16777216……

といった数が得られますが、これを単に「数字の羅列」と見て、「0から9のどの数字がよく現れるか？」を調べたことがありました。（この問題は、何となく生徒の興味に添ううちに、その生徒が私の内から引き出してくれたのでした）。そして数字の個数を紙に書き出すうちに、

偶数： $2 > 4 > 6 (> 8?) > 0$

奇数： $1 > 3 > 5 (> 7?) > 9$ （>は数字の個数の関係）

という傾向がありそうだ、ということに気付いたのでした。24番目の数まで取って調べた結果ですが、それを100番目の数まで取っても、上の個数の関係は、保たれたままだろうか？ それとも変化するのだろうか？——私にも答は分かりませんでした。もちろんこの教科書にも載っていません。でもそれを考えていたんだ——そういう思い出が、きっと将来の「数の情緒」となるのだろうと信じます。

（文責 福西亮馬）

—中学生の部—

『中 1 ・ 英語の基本』

(火曜日 6 : 40~8 : 00)

担当 Fujita

中学校のクラスでは基礎をしっかり身に付けてもらうことを考えて授業を行っています。英語の勉強は基礎の上に基礎を重ねて積み上げていかなければならないという難儀な性質を持っています。例えば、一般動詞を使った文を組み立てることができなければ、関係代名詞の用法を理解することができません。

日本の英語教育は文法偏重型と呼ばれ、「読み書きはできるけど会話ができない」と批判されてきました。しかし、会話を偏重して、書いてあるものはまったく読めない、英語で文章を書くなんてもっての外という状態になっては危険です。英語を話すということは従来の英作文のスピードを速めた状態と言えます。だからこそ、基礎的文法を大切にして積み重ねを重視した授業を行っています。

文法的事項と並行して、授業中は細かい発音指導も行っています。日本語を母語として育って、ある程度の年齢に達してしまうと、耳でいくら聞いても英語の発音はうまくなりません。母語の音声は人間の耳に大きく影響し、ある音とある音とを混同して一つの音のように聞かせることがあります。よくある例えですが、日本人は L と R の音の区別がつかないと言われます。

聞いて違いがわからない音を正しく発音できる道理がありません。そこで、英語を母語とする人の口の動きを専門的に分析した結果を利用して、いかにして同じ音を再現するかにこだわって指導しています。日本語では意味の違いを成さない音の違いでも、英語では重要な違いになりえます。口の形の図解や実演を利用してわかりやすい発音指導に取り組んでいます。

基礎的な練習の繰り返しは、単純で退屈なものかもしれません。しかし、英語の学習を一朝一夕にすませる方法はありません。だからこそ、中学生の繰り返し練習をお手伝いできるような授業に取り組んでいます。

(文責 Fujita)

『中 2 ・ 英語の基本』

(木曜日 6 : 40~8 : 00)

担当 山下太郎

英語は基本が大切です。とりわけ中学一年生の勉強が決定的に重要です。この勉強をあいまいにしては、学年を問わず日々の勉強が重く、しんどく感じられます。

昨年以來、全員に中学 1 年生用の問題集を徹底的に解いてもらいました。間違えるたびに、辞書を引いていちいち確認していきました。それが功を奏したのでしょうか。今は、2 年生の問題集をすいすい仕上げています。めいめいが自分で選んだ問題集を使っていますが、薄い本を選んでも、厚めの本を選んでもそれは自由です。各自が自分でノルマを決め、それを授業時間内にこなしていきます。

私は各自の自習ぶりを見てまわり、きりのよいところで採点し、赤ペンでコメントを書いています。あいまいにしておくと思われる間違いについては、一緒に辞書を引いて例文にマークをさせています。単に「辞書を引きなさい」と指示するだけでは駄目で、最初は横について辞書の引き方を一から教える必要があります。これを丁寧にやると、英語に関し「自分で勉強ができる」生徒になり、これを怠ると「自分で勉強をする気がわからない」生徒になります。

英語の勉強は、辞書を丁寧に引くことに加え、やはり地味な文法のドリルが重要です（一斉授業では個々の過ちをあいまいにしたまま先へ進みがちです）。小学生の漢字の書き取りと同じで、やれるときに徹底してやっておかないと、高校に入ってから、勉強の理解に大きなハンディを抱えるこ

とになります（逆に、高校生で英語に不安を抱える者は、思い切って中学1年生の勉強からやりなおすべきです）。それはちょうど、「てにをは」があいまいなまま、漢字ばかり覚えても、日本語が理解できないのと同様です。

語彙について言えば、中学の段階でできるだけ積極的に高校レベルの語彙にも親しむべきです。派生語、反意語、単語の成り立ちに留意すれば語彙力は飛躍的に伸ばせます。そして、この習慣は、辞書を面倒がらずに引く中で自ずと会得できるものと思います。そのやる気を引き出すためにも、私自身、英語の語源に話が及ぶときには、率先して大英和辞典を引いてみせ、ときにはギリシア語、ラテン語の辞書も引きながら、英単語の成り立ちの話をするよう務めています。

（文責 山下太郎）

『中2・数の基本』

（木曜日 8:10~9:30）

担当 下村昭彦

$$x = \frac{\sqrt{5+1}}{2}$$

これは、二次方程式 $x^2 - x - 1 = 0$ の解のうちの一つです。高校1年生で習う解の公式さえ知っていれば、誰でも解ける問題です。では、この数字の意味するモノは？

数学とは、数や式の意味を追求する学問です。この数字が何を意味するのか、この数式は何を意味するのか。そして、物事を数式で表すことでより理解を深めようとする学問です。

お見せした数には二つの意味があります。その一つは、フィボナッチ数列(1, 1, 2, 3, 5, 8, 13, 21, …と続く数列)のある項とその前の項の比の極限です。そして二つ目の意味は黄金比です。

今の学校教育では、残念ながらこの二次方程式の解き方を習う際に、この式が何を意味しているのか、ということ習うことはありません。しかし、フィボナッチ数列について考えるとき、黄金比について考えるとき、この方程式が解けなければその数の意味に辿り着くことができません。計算練習ほど面白くないことはありませんが、計算力ほど数学について考える上で重要なことありません。いくら面白いアイデアが生まれても、計算力がなければその考えを発展させることができないからです。

数学のクラスでは、数学のおもしろさや数式の意味を知ってもらうこと、そして自ら数学を学びたいと感じてもらおうこと、を最終目標としています。

中学校2年のクラスでは、主に中学1年生の復習と授業の先取りをメインに行っています。中学の数学では文章題もさることながら、計算問題の練習が特に重要です。数学においては理解し、式を立てることこそがもっとも重要ですが、計算し解答まで導かなければ理解を活かすことができません。にもかかわらず、計算問題はおろそかになってしまいがちです。そこで、このクラスでは計算問題にも力点を置き、文章題などの発展問題に進んだときにも計算でつまづいて数学を面白くないと感じることのないよう注意しています。また、わからないところがあれば理解できるまでとことんつきあっています。数学嫌いを防ぐには、数学を面白いと思ってもらおうことこそが最も重要です。生徒に数学を面白いと思ってもらえるよう、工夫を重ねていきたいと考えています。

（文責 下村昭彦）

—高校生・一般の部—

『日本語の読み書き』

(火曜日 6 : 40~8 : 00)

担当 某

高校生クラスの日本語の読み書きでは、秋学期にプラトンの著作を使って思考力の鍛錬を行いました。毎回小論文をその場で書き、講師とその場で読み合わせをし、すぐその場で添削がなされる、というところちょっと大変そうに思えますが、ひとつの哲学作品をじっくりと読み込むことで数学的な論理的思考力も養われます。冬学期からは、「大学入試までを視野に入れる」学習ということで、古文の読解を行っています。

テキストは『堤中納言物語』という平安時代の物語ですが、内容はちょっと変わっていて面白いものです。これを全部読みます。授業は、古典文法の基本と語彙の習得が主眼で、これが身につけばセンター試験までのほとんどの対策が可能になります。大学の二次試験でもそうですが、国語に関しては古文と漢文は重要かつ最も確実な得点源であり、努力すればただけ報われるのです。まず予習段階でその日進む分の全ての文法解析と現代日本語訳（可能ならば英訳でも良い）をしてもらいます。授業はその確認を行います。訳文の読み合わせと徹底的な文法解析です。予習は、最初は大変だと思います。しかしだんだん楽になってくるはずですよ。古文を「読む」楽しみさえ生れると信じています。

(某)

『英語の読み書き』

(火曜日 8 : 10~9 : 30)

担当 Fujita

高校のクラスではすでに身に付けた英語の知識をさらに応用することを目的としています。英語の勉強は基礎の上に基礎を重ねて積み上げていかなければならないという難儀な性質を持っています。例えば、一般動詞を使った文を組み立てることができなければ、関係代名詞の用法を理解することができるはずはありません。

日本の英語教育は文法偏重型と呼ばれ、「読み書きはできるけど会話ができない」と批判されてきました。しかし、会話を偏重して、書いてあるものはまったく読めない、英語で文章を書くなってもっての外という状態になっては危険です。英語を話すということは従来英作文のスピードを速めた状態と言えます。だからこそ、基礎的文法を大切に積み重ねを重視した授業を行っています。

今年度の高校生のクラスでは、生徒と相談して、英語の教科書ではなく、日本の小説の英語訳や元から英語で書かれた本の一部を精読しました。学校で使用する教科書は、日本人の手によって編集されています。もちろん、ネイティブスピーカーのチェックは入っていますが、生の英語というにはほど遠いものです。英語を母語とする人によって書かれた文章を読むことによって、より実践的な英語力をつけることができると考えています。

基礎的な練習の繰り返しは、単純で退屈なものかもしれません。しかし、英語の学習を一朝一夕にすませる方法はありません。だからこそ、高校生の繰り返し練習をお手伝いできるような授業に取り組んでいます。

(文責 Fujita)

『数と自然』

(木曜日 8:10~9:30)

担当 下村昭彦

$$x = \frac{\sqrt{5+1}}{2}$$

これは、二次方程式 $x^2 - x - 1 = 0$ の解のうちの一つです。高校1年生で習う解の公式さえ知っていれば、誰でも解ける問題です。では、この数字の意味するモノは？

数学とは、数や式の意味を追求する学問です。この数字が何を意味するのか、この数式は何を意味するのか。そして、物事を数式で表すことでより理解を深めようとする学問です。

お見せした数には二つの意味があります。その一つは、フィボナッチ数列(1, 1, 2, 3, 5, 8, 13, 21, …と続く数列)のある項とその前の項の比の極限です。そして二つ目の意味は黄金比です。

今の学校教育では、残念ながらこの二次方程式の解き方を習う際に、この式が何を意味しているのか、ということを知ることはありません。しかし、フィボナッチ数列について考えるとき、黄金比について考えるとき、この方程式が解けなければその数の意味に辿り着くことができません。計算練習ほど面白くないことはありませんが、計算力が数学について考える上で重要なことでもありません。いくら面白いアイデアが生まれても、計算力がなければその考えを発展させることができないからです。

数学のクラスでは、数学のおもしろさや数式の意味を知ってもらうこと、そして自ら数学を学びたいと感じてもらうこと、を最終目標としています。

高校生のクラスでは、学校の範囲を超えてより発展的な内容に触れることを心がけています。現在の入試制度のもとでは、残念ながら教科書だけでは入試問題に対応することができません。ですが、入試問題は現実的な社会的・工学的・理学的問題と密接に関わっていることが多いのです。数学的な問題が実際に生活の中で活かされていることを知ってもらえれば、数学を好きになってもらえるはずで、また、思考ゲームとしての数学のおもしろさ、すなわち論理的思考法を習得してもらうことも目指しています。論理的思考は、文科系・理科系問わず、問題解決の際に必ず必要となる能力です。数学を通して、順序立てて物事を考える技術を身につけてもらいたいと考えています。

(文責 下村昭彦)

『数の世界』(高校生)

(火曜日 8:10~9:30)

担当 福西亮馬

高校生の「数と自然」が基礎から発展にかけての学習を丁寧に指導する一方で、「数の世界」ではさらに今している数学の勉強そのものの意味付け、あるいは大学生の先取りとなるような数学をしています。

さて「幾何学に王道なし」とよく言われますが、実は高校で習う既成数学はその王道です。とりわけ教科書とは、数学者たちが、帰納につぐ帰納で築き上げた諸定理を、順序立てて作られた、いわゆる高速道路のことです。それを意識することができれば、学校で習うことはもっと(高速道路を利用するわけですから)価値があるように見えてきます。では、そのような「価値の分かる」視点を得るには、どうすればいいのでしょうか。

学校の授業時間では、習いたての定理をいくつかのパターンの問題に適用すること、つまり演繹が主になります。一時間でたくさん問題を解ければ、それだけ基礎が定着していると分かります。ふつう塾で言う学校の補いとは、この練習の充満をさすのでしょうか。

しかし学校の補いといえば、それはもう一つあります。演繹とは反対に、いくつかのパターンから出発して、自分なりに定理を発見すること、つまり帰納することです。一つの定理を導くために、泥臭く手を動かし、考え続けることです。

演繹では考える瞬発力、帰納ではその持久力が伸びます。両方あって両方とも意味が現れるのです。ただ学校の勉強では、後者の時間がどうしても不足します。そこでもし自分の時間——妨げられざる、切り刻まれざる——の中でそれを補うことができれば、学校で習うことの価値を再発見し、かつ向学心につなげることができるのです。しかしそうは言っても、この視点は、大学に上がってからようやく後で気付かされることなのです。

従って、このクラスでは、帰納的な発見をする時間に重きを置き、またその間にどうしても必要不可欠な演繹は補いつつ、今学校で習っている知識の大切さを知ってもらうことを目指しています。

(文責 福西亮馬)

『ラテン語入門』

(木曜日 8:10~9:30)

担当 山下太郎

教科書は『ラテン語初歩』(岩波書店)を使用しています(これは通信講座用の教科書でもありません)。

授業では、活用変化を全員で合唱することから始め、その後、練習問題の答え合わせをします。内容はラテン語を和訳するものですが、受講者の熱意に助けられ、1回の授業で4課ずつ進んでいます。これはかなりのハイペースですが、文法の学習はだらだらやるより一気に片づける方が効果的です。教科書には和文羅訳の問題もついていますが、これについては、授業中に答え合わせをする時間が惜しいので、後日復習をかねて電子メールで解答を受けつけ、私が添削してお返ししています。

今のクラスは12月からスタートしましたが、この調子で行けば、今学期中に教科書は最後まで終わります。春からは、キケローかセネカの講読クラス(後述)にスムーズに合流できるものと確信しています。

(文責 山下太郎)

『ラテン語講読 I・II』

(I 水曜日 8:10~9:30 / II 金曜日 8:10~9:30)

担当 山下太郎

水曜日のクラスでは、昨年春からキケローの『老年について』(De Senectute)を読んでいます。もう全体の半分近くまで読んだ計算になります。授業は、大学の演習と同じスタイルで進めています。最初に受講者がテキストの音読をし、その後に訳を発表してもらいます。その際、意識はNGで、原文に密着した直訳を求めています。これによって、文法の理解度を正しく確認することができるからです。

キケローのこの作品は、人はいかに老いるべきか、いいかえれば、人は何を旨しいかに生きるべきか、という哲学の根本的な問題にふれています。毎回、ハッとさせられる表現やものの考え方に遭遇できるので、私も受講生のような気持ちで、わくわくしながら授業に臨んでいます。

…しかし、この人たちは、自分にはまったく関係のないことが分かっていることにせせと励んでいるのである。

次の世代に役立つようにと木を植える

と、わが同胞スターティウスが『若い仲間』で述べているように。まことに、農夫なら、どれほど年老いていようが、誰のために植えるのか、と尋ねられたら、ためらわずこう答えるであろう、「不死なる神々のために。神々は、私がこれを先祖から受け継ぐのみならず、後の世に送り渡すようにとも望まれた」。

——キケロー『老年について』(中務哲郎訳)

一方、金曜日のクラスでは、昨年春からマルティアリスの『寸鉄詩』(Epigrammata)を読んできました(テキストは大学書林のアンソロジー)。この本は昨年末で読了し、今年に入ってから、ローマの哲人セネカの作品を読んでいます。タイトルは『幸福な生活について』(De Vita Beata)です。授業の進め方は、キケローのクラスと同様です。哲学といっても、ごく平易な日常の言葉で書かれているため、内容的にも親しみがもてます。

(文責 山下太郎)

青春ライブ・レビュー

第11回目(2005年1月14日)

講師: 福西亮馬

題名: 『児童書から教わったこと』

児童書から教わったこと——それは、思い出すこと

参加者が三々五々集まった頃、静かにピアノの曲が流れ出しました。福西先生による演奏の始まりです。皆の心が静まり、拍手の鳴る中、今度は机いっぱいに並べられた児童書のひとつひとつを手にとりながら、現在に至るまでの読書の思い出を順々に語っていかれました。

福西先生は、幼い頃から空想にふけることが大好きな少年でした。絵本や児童書は常に空想の世界に誘う秘密の窓口であり、そこには現実世界で経験できない数多くの出来事や、仲間との出会いがありました。やがて中学に上がると、それらの舞台に出てくる地名を精緻に書き込んだ手製の世界地図を作るなど、児童書に触発された空想の遊びは、とめどなく発展していきました(その地図の実物をご披露頂いたのですが、参加者の誰もが思わず息をのみ、目を疑うほどのできばえでした)。

しかし、高校に上がる頃には、そのような「遊び」への後ろめたさを感じるようになり、この気持ちを払拭するかのように勉強にも力を入れたそうです。そして、無事に大学入学を果たすと、専門の機械工学の領域はもちろんのこと、「虚学」と呼ばれる学問も含め、一心不乱に勉強に打ち込まれました(ラテン語を習得されたのもこの時期のことです)。やがて、「世の中に役に立つものをつくりたい」という強い気持ちから大学院に進学され、「実学」——「制御」の理論——の研究に没頭する日々が続きました。

そんなある日、ふと目の前に飛び込んできたのが次の「太陽」と題する詩でした。

おさな子の詩

5才男児

太陽

先生 太陽ってなんぼある？
山科の家にいった時もあつたで——、
山口の家にいったときか——、
先生 北極にも 南極にも あるんやろ——、
先生 屋上にも太陽あるな——、
先生 見張りしてゝや——、
僕 運動場にもあるか見てくるからな！

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、この詩の中で「太陽ってなんぼある？」と尋ねた園児が福西先生ご本人であり、また、この詩の作者は、幼稚園時代にお世話になった担任の先生なのでした。この詩に出会い、福西先生は大きな感動に包まれます。時空を超えて自らの「思い出」との遭遇を可能にする言葉の力を思い、何より自分の言葉を大切に書き留めて下さった先生への感謝の気持ちに満たされました。このとき心の中で強く決意されたそうです。「自分も子ども

の言葉を大切にできる大人になりたい」と。

この決意は、それまで愛着を覚えながらも、現実からの逃避と受け止めがちであった自らの懐かしい思い出——児童書を読み、空想の世界に遊ぶこと——の意義を再確認することにもつながりました。福西先生によれば、「児童書とは、子どもの時に読む本ではなくて、子どもの時を思い出す本」であり、(上に引用した詩のように)「大人の作者が子どもという常に生まれてくる者のために、自らの思い出を書き残した本」のことで

す。先生はさらに、ファージョンの作品を紹介しながら、子ども時代の心を「今」に蘇らせる創造の原理が、児童文学を創作する作家の原理と共通することを具体的に指摘していかれました。このとき、表題の「児童書から学んだこと」に関連づけて、次のように締めくくられたのが、たいへん印象深く感じられました。



「私が児童書から学んだことは、過去を思い出すことの意味でした。人はよく、『今を大事に生きなさい』と言いますが、それは、『いつか今を懐かしく思い出せるように生きなさい』ということです。私の場合、たまたま先生が自分の言葉を書き残して下さったのですが、それは運がよいのであって、皆さんの場合、やはり自分で自分の経験を言葉にして書き残してほしいと思います。まずは自分のやりたいことを夢中になってやり続け、一方では言葉にならない言葉も含めて、なんとか文字にして書き残してください。いつかそれを読み返し、懐かしく思い出す自分を想像しながら。思い出は自分を強くし、生きる力の源となると信じます。」

「今を思い出せるように精一杯生きる」——それは簡単なことのように思えますが、実践するのはなかなか難しいことです。人生を主体的に生きない限り、過去を懐かしく思い出すことはできないからです。事実、自分の感情を押し殺し、人まねを繰り返すだけでは、思い出の源となる経験を育てることはできません。

この日「青春ライブ授業！」に参加した生徒たちは、誰もがしーんとしてお話に聞き入っていました。冒頭で流れたピアノのメロディーが、最初から最後まで静かに流れていたと感ぜられるほどでした。そんな適度に張りつめた空気の中、先生は「今を生きることの意味」について、希望に満ちた小・中・高生に真摯に語って下さいました。それは子どもたちに対する最高のオマージュとして、また、心からの激励として、彼らがいつか将来ふりかえったときに、必ずや心に残る思い出に熟成するものと確信しました。

(文責 山下太郎)

火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
<ul style="list-style-type: none"> ○ しぜん(冬季休講) ○ かず(小・中級) ○ 中1英語の基本 ○ 英語の読書(高校) ○ 数の世界(高校) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ことば(小・低学年) ○ ことば(小・中学年) ○ ラテン語講読Ⅰ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ かず(小・初級) ○ かず(小・上級) ○ 中2英語の基本 ○ 中2数の基本 ○ 数と自然(高校) ○ ラテン語入門 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ラテン語講読Ⅱ 	
10	20	30	40	5 ミニミニ am10:00~11:00
80 「プレ英語」終了日 (5回目)	90	100	110 青春ライブ!(12) pm7:00~8:30	
150	160	170(終) 木曜日クラス終了日	180(終) 金曜日クラス終了日	
220(終) 火曜日クラス終了日	230(終) 水曜日クラス終了日		25 青春ライブ!(13) pm7:00~8:30	

『声』

no. 14 山下育子先生——「しぜん」クラス(11月30日)



落ち葉神経衰弱



モミジめくり



モミジばばぬき



最後に、全員でハイポーズ!!!

【かんたん落ち葉カルタの作り方／IKUKO 風】*電話帳を利用します。

- ① 落ち葉1枚を、ティッシュ2枚の間にはさみます。
(ティッシュを使うのは、葉に印刷のインクがつかないようにです)
- ② 電話帳の間に計30枚を約一週間、そっとはさみ込んでおきます。
→上に約2kgほどの重石をのせる。
- ③ カード台紙(ボール紙くらいの厚さ)を押し葉の枚数分用意し、その上に来上がった押し葉1枚をのせ、細くカットしたセロテープで、葉、枝を数カ所とめていきます。
- ④ 押し葉が痛まないように、カードにビニール袋をかぶせピッタリの大きさになるようカバーをします。

さて次にあげるのは、子どもたちで考えついた『落ち葉カルタ』の遊び方です。
(『落ち葉神経衰弱』『モミジばばぬき』もありますよ!>ウェブログ)

■モミジめくり

- ① 百人一首のぼうずめくりの要領で、カード30枚を下向きに積み重ね上から順にめくっていきます。
- ② 「モミジカード」(全部で6枚あり)が出たところで、手持ちのカードを全て差し出します。
- ③ 次に「モミジカード」をめくった人は、前に差し出されたカード全てがもらえます。その繰り返して進みます。

『あーあ、残念!』 『なかなか増えへん』

『私、出してばかり…ショック!』

傍ら、着々と懐を肥やしている子は、ニンマリニンマリ・・・。

『うふっ! 今度は最後にたくさん取れたわ!』——よかったわね——

*白熱して次々とカードをめくっていく途中で、突然、少し小さめの個性的な赤いモミジカード(ぼうず)が出たら、何だかヒヤッとするのを感じます。前に出ているカードをもらえるときは嬉しいのですが、手持ちカードをすべて差し出すのは、とてもショックなのです…。

秋の落ち葉を集めに出かけ、みんなで拾った落ち葉で作った『落ち葉カルタ』。それぞれの葉の特徴、色、大きさを、遊びながら自然に覚えてしまった、秋学期最後の楽しいクラスでした。

『落ち葉カード』は、自分の好きなカードを選んでお土産に持って帰りました。
(ウェブログ2月8日の記事より抜粋)